海外体験記

歴史と緑に囲まれたオックスフォード大学

大学院ソシオテクノサイエンス研究部 先進物質材料部門 講師
中川 敬三（なかがわ けいぞう）

オックスフォードはロンドンから列車で1時間のイングランド南東部に位置しており，歴史ある建物が印象的な街です。中心部には約40ものカレッジが点在していて、ガウンやタキシードを身にまとった教授や学生が街を歩いており、オックスフォードの伝統や格式を肌で味わうことができます。

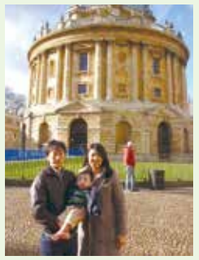
２０１３年４月から２０１４年３月までの１年間，オックスフォード大学（Wolfson Catalysis Centre, Inorganic Chemistry Laboratory, Department of Chemistry）に客員研究員として滞在させて頂きました。私の所属したDepartment of Chemistryは過去には数多くのノーベル化学賞受賞者を排出し、記憶の新しい所では昨年死去されたマーガレット・サッチャー元英国首相もここで化学を学ばれたようです。公園の緑や歴史的な建造物を眺めながら研究室に通うのは毎日の楽しみでした。

私が滞在させて頂いたのは、構造制御された無機ナノ材料を利用して太陽光や水素など持続可能なエネルギーシステムの構築に向けた触媒材料開発に取り組まれているS. C. Edman Tsang教授の研究室で、イギリス以外にもアメリカやドイツ、中国など国際色豊かなメンバーで構成されておりました。月曜日の朝にはAbbot's Kitchenと呼ばれるゴシック調の八角形の形をした建物の中で紅茶とクッキーを頂きながらアットホームな雰囲気で研究セミナーが行われ、白熱するディスカッションに張り切って参加していました。研究に関しては、「２次元ナノ構造光触媒の開発と水の光分解による水素生成反応」に関する研究に取り組みました。こちらの学生に負けまいと居室と実験室を何度も往復し、忙しい毎日を過ごしておりましたが、自らの手を動かして実験することがどれだけ大変で重要であるか、また新しい発見をする度に研究の面白さというものを改めて実感しました。研究環境が異なるため思い通りに事が運ばず気が焦る時期もありました。そんな時Edman先生が「コーヒーでもどう?」と気軽に声を掛けてくれて研究について励まして頂いたことが非常に嬉しく、家に戻り妻に報告したことも度々ありました。英語での会話はそれほど不安には思っておりませんでしたが、自分の意思を伝えるのは予想以上に苦労し、特に研究報告する際は緊張もして留学当初は帰宅するとクタクタになっていたのを覚えています。

オックスフォード大学は生活面においては国外からの研究者に対するサポートは非常に充実していたと思います。Newcomers´Clubと呼ばれるコミュニティでは、研究者のパートナーに対してコーヒーモーニングや英会話グループ、手芸クラブなどの交流する場を提供しており、私の妻も楽しく通っていたようです。おかげで我々研究者は安心して研究に専念できるわけです。留学中の一番大きな出来事と言えば、このオックスフォードの地で息子が誕生したことです。海外での出産となり妻も少なからず不安だったと思いますが、義母や英国の友人の多大なサポートもあり、２０１３年８月に無事に長男が生まれました。かけがえの無い良い思い出となったことは言うまでもありません。

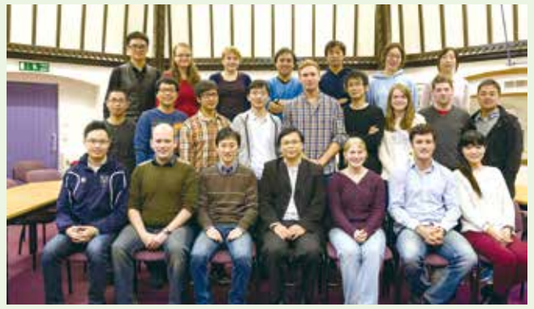
長い間夢見ていた海外留学を無事に終え、新たな目標も見つけられたことが、この留学の一番の収穫となりました。これを自分の研究生活の新たなスタートとして、より一層研究に邁進していく所存です。

最後になりましたが、留学に関してご尽力頂きました同講座の杉山 茂 教授、加藤 雅裕 准教授、この留学を推薦して下さいました神戸大学の西山 覚 教授、谷屋 啓太 助教、そして本稿の貴重な機会を下さった太田 光浩 教授にこの場をお借りして深く御礼申し上げます。


家族と共にRadcliffe Camera前で

研究室のメンバーと共にCherwell川でパンティングしている様子

研究室の友人とUniversity collegeにて


Abbot's Kitchenでのグループ写真（手前中央がEdman Tsang教授、その左が本人）

What's happening?

留学生滞在記

徳島での生活を満喫

栄養生命科学教育部 博士前期課程 1年
林 珮儀［台湾］（リン ペイイー）

台湾からきた留学生の林珮儀と申します。２０１３年の秋から、栄養生命科学教育部食品機能学分野の修士課程で、寺尾純二教授をはじめ、向井理恵先生にもご指導を受けながら勉強しています。

台湾の大学に通っていたとき、偶然のきっかけで日本に初めて来て、短期交換留学生として北海道に一年間滞在しました。台湾人にとっては日本という国は近くて関係のよい国ですが、当時の私は日本語が全くできなかったため、不安がいっぱいでした。しかし、その一年間、たくさん貴重な経験をすることができました。北海道でお世話になった先生のご紹介で徳島大学に進学することができ、北海道での留学生活が私の人生を違う方向へ導く転機になりました。

徳島に来てまだ一年ほどで短いのですが、周りの人に恵まれ、生活にもすぐ慣れました。来日当初は私の出身の町と比べ、徳島の交通手段が少ないと感じましたが、毎日自転車で通学することで徳島の気候と街の息づかいを感じることができ、徳島の良さを肌で感じることができていると思います。おおらかな人たち、住みやすい街、おいしくて新鮮な農産物など、徳島には私の大好きなことがたくさんあり、住むのがあっという間に楽しくなりました。

現在、私はフラボノイドによる筋萎縮の回復への機能に関する研究をしています。この研究を通して、必要な実験の技術や研究に対する正しい考え方を学ぶことができています。現在行っている実験は私一人だけではできないものばかりなので、作業をグループの人たちと分担して行っています。私は徳島に来て「グループワーク」の大切さも学びました。チームワークというのは日本の企業や学校で大事なもので、日本人にとってはごく普通のことだと思いますが、台湾の教育を受けた私にとっては、初めての体験でした。チームワークということは知っていましたが、チームのメンバーそれぞれが適切な流れを考え出して準備をし、困難なときには他のメンバーとよく話し合い、お互いに助け合いながら問題を乗り越えるのを、徳島に来て実体験を伴ってよく知ることができました。

日本と台湾は国が違うだけでなく、文化や価値観も異なり、言葉も違うので勘違いをして恥ずかしい思いをすることもあります。でも、日本で本当にいろいろなことを勉強できて、とても楽しいです。専門の研究のメンバーにもよく迷惑をかけてしまうのですが、もっと日本語を上達させ、周りの人に対する気配りを学んで、より円滑な人間関係が築けるようにしていきたいと思っています。

将来の進路についてはまだはっきりわかりませんが、後から振り返って後悔のないように、自分らしく生きていきたいと思います。まだ若いうちに自分に限界を作ることなくたくさんの経験を積んで、研究や学業はもちろん、日本の文化を学んだりいろいろな人と交流をしたり旅行をしたりして、徳島での生活を楽しみたいと考えています。

研究室のメンバーとお花見

京都にて

寺尾先生と一緒に